食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容

成　　元　哲
牛　島　佳　代

『中京大学現代社会学部紀要』　第14巻　第2号　抜　刷
２０２０年１２月　　PP. 113～126

食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容[1]

成　元　哲
牛　島　佳　代

1．3.11 後に誕生した新たな共食の場

戦争や災害など、極端な社会変動の時期には、人と人とのつながりも大きく変化することがある。「3.11」と評される東日本大震災と福島原発事故の余韻が残る 2012 年に誕生してから 8 年間で、その数は全国で約 4000 カ所に達し、ある調査では市民の約 8 割が「その言葉を聞いたことがある」と回答するほど知名度も上がっている社会活動がある[2]。それは子ども食堂である。2020 年 2 月末、新型コロナウイルス感染拡大の恐れから、全国一律の休校要請が行われ、その結果、学校給食がなくなった。そんな状況で注目されたのが子ども食堂である。子ども食堂は食事を提供するだけでなく、人と人とのつながりをつくる、コロナ時代の言葉で言えば、3 密を作り出す活動である。コロナ禍のいま、全国の子ども食堂の約 4 割が休止・停止状態にある。しかし、それを上回る子ども食堂全体の約半数が、企業や家庭で余った食料を集めて困窮世帯に配るフードパントリーや弁当の配布活動にシフトし活動を続けている[3]。感染リスクのため、居場所としての開催が困難なコロナの時代において子ども食堂に対する社会の注目度は最も高い（図 1、参照）。なぜコロナの時代に子ども食堂が注目されるのか、また、その子ども食堂は何か。本稿は子ども食堂を、食卓をめぐる新たなソシアビリテ（社交性、社会的つながり）として捉え、それがいつ誕生し、コロナ禍の今、どのように変容しているのかを素描してみたい。

冒頭から私事で恐縮だが、筆者は2016年5月頃から、ゼミの学生たちと、愛知県内の子ども食堂にボランティアとして関わりながら、所在地、開催日時、料金など運営実態を調べ、「愛知県子ども食堂マップ」を製作した。当時、愛知県内の子ども食堂は10か所ほどであったが、半年余りで30か所以上に上った。急増する子ども食堂の背景を探り、利用希望者の参考になればと、子ども食堂マップを更新し、記録をとる作業を続けている。2017年6月には、県内各地の子ども食堂が寄付や運営のノウハウを共有し、横につながる「あいち子ども食堂ネットワーク」の発足の呼びかけ人となった。

愛知県に限らず、子ども食堂の取り組みはここ数年で全国に広がった。子ども食堂は、貧困や孤食などが社会問題となる中で、地域の子どもやその親らを対象に、無料または安価で食事を提供する民間発のボランタリーな取り組みである。こうした活動は古くからあるが、「子ども食堂」という名前が使われ始めたのは、2012年からである。名づけの親とされる東京都大田区の近藤博子さんは「子ども一人で来ていいんだよ」と呼びかける気持ちを込め、「子ども食堂」と名前をつけたという[4]。

全国各地に広がる子ども食堂は2016年5月の319カ所[5]から、2019年6月にはその10倍以上の3718カ所[6]に急増し、大人も含めて誰でも集える地域の居場所になっている。見知らぬ子どもから子育て中の母親、高齢者までが集い、家族機能のシンボルのような「食」を共にする子ども食堂。ある地域社会や社会集団にみられる人と人との結合関係、あるいは「おつきあい」の様式を、社会史の研究ではソシアビリテという[7]。後の歴史から振り返るとき、2010年代の日本社会は、空前の盛り上がりをみせる子ども食堂で、家族ではないものの、共に食事をとりながら交流する「食卓をめぐる新しいソシアビリテ」が誕生した時代として記憶されるかもしれない。

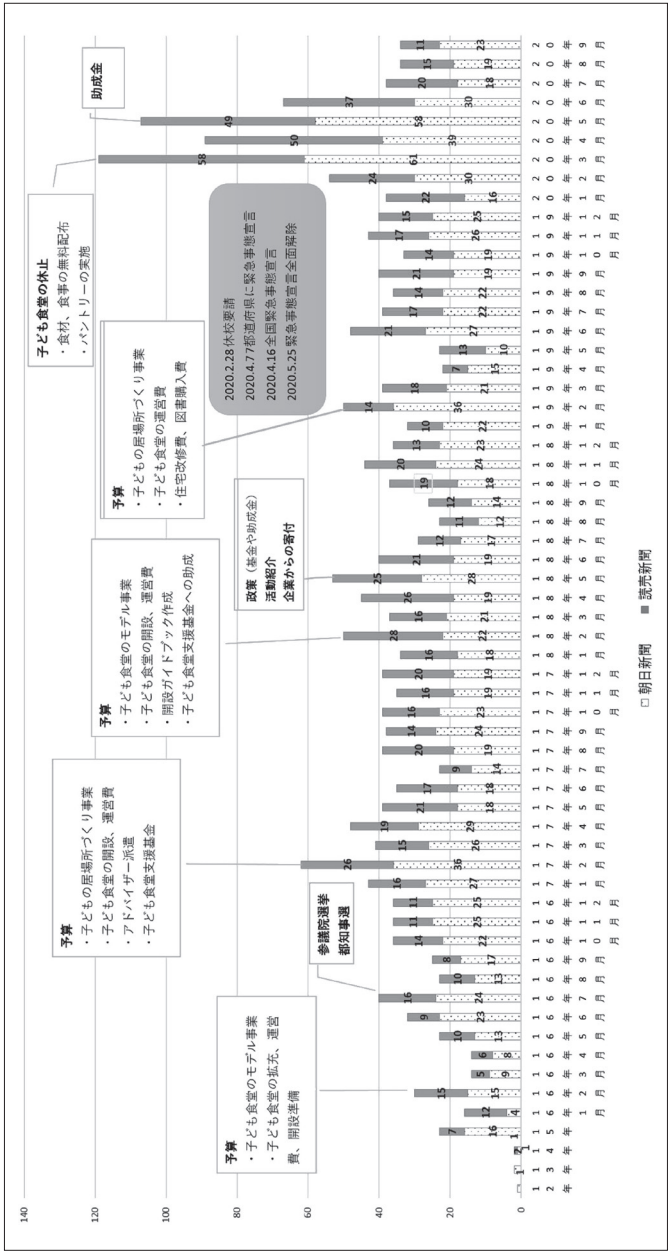

図１　子ども食堂の新聞記事件数[8]

2. 孤食の時代、食を媒介とした新しいソシアビリテ

農林水産省がまとめた2017年版『食育白書』によると、すべての食事を一人で取る日が週の半分を超える人が15.3%を占め、その比率も上昇しているという。単身・少人数世帯が増えることで、こうした「孤食」が進む可能性があり、地域や職場などで食事を共にする機会づくりが重要だと指摘した。また、誰かと食べる頻度が高いほど栄養バランスが良くなることから、高齢の単身世帯の増加などに備え、地域の食事会といった活動を推進するよう促した。

一方、農林水産省が2017年秋、民間団体や全国の社協に協力を得てインターネットや郵送で子ども食堂の現状と課題を調査し、274団体が回答した[9]。それによると、約8割が任意団体やNPO法人などによる運営であり、スタッフの平均は1回の開催あたり約9人であった。常にスタッフが足りない食堂は13.9%、足りない回がある食堂は28.1%であった。運営費の確保について7割が年間30万円未満と答え、助成制度を利用しているところは68.6%だった。過去1年で、運営に「持ち出し」をあてたと答えた団体は58.0%にのぼり、資金面で苦労する様子が浮き彫りになった。活動目的として9割近くの食堂が「生活困窮家庭の子どもの居場所作り」を意識している。だが、参加対象をこうした子どもに絞っているのは7%ほどで、ほとんどの子ども食堂が地域の交流拠点としての役割を担っている様子がうかがえる。子どもからのSOSなどを見つけ、他の支援機関につなげた経験があると回答したのは43.4%であり、その内訳は行政55.5%、民生委員・児童委員27.7%、学校26.9%などとなっている。

孤食の時代に呼応するかのように、子ども食堂という名の食卓をめぐるソシアビリテは2012年に誕生し、2019年にはその数が全国で4000カ所近くまで広がった。何がこうしたうねりを作り出しているのか。結論を先取すると、子ども食堂は東日本大震災・福島原発事故の3.11がもたらした関係性の再編の産物である。3.11をきっかけに、全国で脱原発運動が活発になり、これに触発され様々な活動が盛り上がったが、大きな社会の流

れを作るものには至っていない。国民の意識の中で脱原発や再生可能エネルギーが高まったのは事実であるが、我々の生活や人間関係の再編につながるほどの大きなうねりにはなっていない。それとは対照的に、子ども食堂は震災翌年に誕生し、全国的に盛り上がっており、今も増え続けていることの意義は大きい。地域で定期的に新たな共食の場をつくり、家族ではないものの、食卓を一緒に囲むソシアビリテができあがった。そして何よりも、子ども食堂が誕生し、急増したことの意義は、それまで子どもの貧困や孤立に関わったことのない新しい担い手を獲得したことにある。その担い手の年齢層は、「団塊世代を中心とした高齢者」、「子育て中か子育てが終わった世代」、「高校生・大学生の若者世代」の大きく三つの世代に分けられる。

現在、多くの子ども食堂は地域に開かれた形で、参加対象を限定していない。また、食事の提供だけでなく、食卓の団欒の延長として季節の行事、ミニ音楽会、絵本の読み聞かせなどさまざまなイベントを行っている。こういったママ友でもPTAでもない地域住民やそれにつながる大人たちが子どもと知り合い、交流する場となっている。さらに、ときには、困りごとのある子どもが出すサインを発見し、次につなげることもある。ただ、限界もある。月に1回から数回、開催している子ども食堂では担いきれない課題が多いことも事実である。

3. お互い様の関係性と隙間支援

ところで、ここで子ども食堂について少し立ち止まって考えてみたい。これまで関わってきた実感からすると、原理的に子ども食堂は一方的な「慈善」ではなく、「お互い様」の関係である。その関係は、一方通行ではなく双方向性である。子ども食堂を支える側も救われるところがあった。子ども食堂は支える側にも新しい役割を与えたり、地域社会において思わぬ形の出会いや地域とのつながりをもたらしたり、心の拠り所の一つとして機能している。その結果、一見貸し借りにみえる関係性を曖昧にし、メン

バーシップの力関係をある程度対等に保つことで、助け合いのシステムが機能している。他者を助けることが自分の喜びになるという温情効果（warm glow effect）が利他的行動を支えている[10]、これが子ども食堂の関係性である。Andreoni（1990）は寄付やボランティアをすることにより、自らが社会の役に立っているという心理的な満足度を高めると指摘する。女優の小林聡美さんは、こういった関係性を「持ちつ持たれつで煩わせ合ってもいいじゃない」、「おせっかい上等！」、「あまり無理はしないというスタンスが案外大事なのかもしれません」と話す[11]。

そもそも、子ども食堂は家庭、学校、地域社会、行政などの手が届かないニーズ、あるいは、そこから零れ落ちるニーズ、その隙間を埋める、対象を限定しない非選別的な支援ツールである。したがって、子ども食堂が従来の家族や地域などの肩代わりはできないが、その隙間を支援する存在として機能している。

子ども食堂は先ほど指摘した通り、3.11 後の関係性の再編の象徴である。子ども食堂は、3.11 以降、露わになったこの社会の関係性をめぐる構造的な欠落ともいうべきものを埋め合わせているかもしれない。それを、テッサ・モリス＝スズキの言葉を借りて表現すれば、子ども食堂は 3・11 後に現れた草の根の自発的な活動、「日本版 DIY（Do it yourself）」であるといえるだろう[12]。彼女によると、1910 年代から今日に至るまで、日本において柔軟性に欠ける公の政治システムが機能し続けているにもかかわらず、インフォーマルな生活政治においては、数多くの魅力的な小規模実験の宝庫であったという。こういった草の根の自発的な活動は、変革のために政府にロビー活動を行うのではなく、現実を変えるために現場に対して直接ボトムアップで働きかけてきた。3.11 後の子ども食堂は家族関係やコミュニティにおいてそこに空いた網の目の隙間を自分たちの手で埋めようとする、「もう一つの小規模の実験」の盛り上がりであるといえるかもしれない。

ところが、コロナ禍は子ども食堂の形式に変化を与えている。これまで

のような地域の様々な年齢層が集まり、食を共にしながら交流するのは難しい。コロナ禍のなか、子ども食堂がどのような形で適応するのか、それぞれ、選択を迫られている。緊急事態宣言が全面的に解除された5月25日以降、三密を避けるべく少人数の予約制で子ども食堂を再開するところも出てきたが、主に高齢者施設で開催してきた子ども食堂は再開が厳しい状態である[13]。居場所としての子ども食堂の再開が難しいこの時期に、それに代わってフードパントリーや弁当の配布活動などを行っているところもある。そもそも地域の子ども会や地域団体、家族・親族といった中間集団が解体したり機能しなくなったりしているところに、子ども食堂がその代わりの一部を担うものとして現れた。そこに市民、NPO、地域社会、行政や企業などが参加し、様々な形の連携を作り出してきた。コロナ禍はこれまでの共食の場としての子ども食堂に、フードパントリーという新しいレパートリーを付け加えている。アメリカにおいてはフードバンクと聞くと、パントリーを思い浮かべるという[14]。これは教会の地下などにある食料倉庫のことで、食べ物に困った人がいつ駆け込んできても大丈夫なように缶詰めなど保存のきく食品を常備している。ほかに月に数回、日を決めて、地域の生活困窮者らに食べ物を無料で配っている。日本型フードバンクの確立を目指しているフードバンク山梨理事長の米山けい子は、フードバンクの活動は明確で、お腹を空かせた人がいたら、すぐに駆けつけて自分の顔を差し出す「アンパンマン」のような存在だという[15]。子ども食堂とフードバンクの連携、または、この両者の併用がこれから本格的に始まろうとしている。

4. コロナ禍の子ども食堂の変容：食卓をめぐる新たなソシアビリテ

「子ども達に食事や居場所を提供し、地域住民との出会いの機会を創出することで、孤食や栄養不足を防ぐとともに、子ども達の生きる力を育むこと、又、関わる市民一人一人の充実した暮らしと社会づくりを目指して

いる。」これは毎週土曜日、愛知県尾張旭市の「多世代交流館いきいき」で開かれる尾張旭子ども食堂「おむすびや」という団体が掲げている目標である。21 世紀に突入して 20 年が経過した日本社会に、こうした子ども食堂を行う団体が 4000 カ所近く存在する。それが、コロナ禍で大きく変容しようとしている。家族を超えて見知らぬ人が集い、食卓を囲む風景とその社会関係の意味はどのようなものなのか。本稿では子ども食堂を「食卓をめぐる新しいソシアビリテ」という概念で捉えてきた。それが変容しようとしている今、ソシアビリテという概念について少し検討しておきたい。

ソシアビリテの概念は、歴史学の領域に導入される前に、集合心理学や社会学の分野で用いられてきたものである。集合心理学では、ある国民や集団の持つ独自の気質を示す概念として、「社交性」「社会性」といった意味合いで用いられた。社会学の分野では、とりわけ、G・ギュルヴィッチの微視社会学において、ソシアビリテの諸形態は社会関係を捉えるための基本概念とされ、一般に「社会的交渉」と訳されてきた。ギュルヴィッチは「組織されたソシアビリテ」と「自発的なソシアビリテ」に区分していたが、これは後にみるモーリス・アギュロン（Agulhon）の発想とも深くかかわっている[16]。

18 世紀のイギリスのクラブや 19 世紀のフランスのセルクル（cercle）にみられるように、産業革命の前後の西欧社会では、比較的少人数の自発的集団がアソシエーション[17]のモデルとなり、政治や経済の領域にも大きな役割をはたしていた。こういった近代社会のアソシエーションは、ギルド、教会、村落共同体など個人が運命的に帰属する伝統的な中間集団が衰退する中で、原子化・無力化から回復するために作り出された自発的な集団である。フランスの歴史学者、アギュロンは『19 世紀ブルジョワ・フランスのセルクル』（1977 年）でアソシエーションの活力が人間集合体のソシアビリテ一般の良き指標であるという。

アギュロンによると、「南仏のソシアビリテ」は、フランス革命の時期

から19世紀にかけて、この地域で急進的社会運動が組織化される際の母体となった。ソシアビリテは、ある地域社会や社会集団にみられる人と人との結合関係、あるいは「おつきあい」の様式である。その意味でソシアビリテは、量と質の両面から特徴づけられる。ある社会において人々の相互行為は濃密であるかもしれないし、稀薄であるかもしれない。これはソシアビリテの量的指標である。それと同時に、それは時と場所によって違ったファッションをとる。例えば、身分上の上下関係を重視するソシアビリテもあれば、同輩的な平等性を強調するソシアビリテもあるだろう。それゆえ、このようなソシアビリテの質的な相違に注目して、フランスのソシアビリテ、啓蒙のソシアビリテ、デモクラシーのソシアビリテなどソシアビリテの諸類型を論じることもできる。

社会学者の間では、ソシアビリテという言葉を用いないにしても、テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフト、デュルケームの機械的連帯と有機的連帯など、社会的結合関係の視点から近代と前近代の社会を類型化した例は少なくない。これらの類型は社会関係の類型であると同時に、社会集団の類型でもある。アギュロンの場合も同様であるが、彼はソシアビリテの歴史の研究がアソシエーションの歴史の研究と不可分であることを指摘する。

フリー・ライダー問題を提起したオルソンが指摘するように、アソシエーションは共通の利害関係や共通の意見の持ち主が存在するというだけでは容易に形成されるものではない。多くの場合、人々がアソシエーションに参加するのは、予め彼らの間に濃密なソシアビリテが存在し、共通の集合心性が成立しているときである。ソシアビリテは、人々の日常生活と密接に結びついた諸制度の中で生まれる。18・19世紀のフランスの農村でソシアビリテの中心となった制度は、労働の相互扶助や、かまど、粉ひき機、鍛冶場、共同洗濯場などの労働手段の共同に基づく諸制度、教会、カフェや居酒屋などの世俗的余暇の制度、地域の祭りなどである。これらの社会制度を通じて人々が交流する中で、その制度の本来の目的を超えた多くの

非公式集団が生まれ、アソシエーションの母体となる[18]。

かつて上野千鶴子は、「選択縁」という概念を提案したことがある[19]。彼女は選択縁を、地縁、血縁、社縁のいずれにも還元できない新しい人間関係の領域に対応したものであるという。選択縁は加入・脱退が自由で拘束性がないため、集団として不安定であり、安定したアイデンティティの供給源になりにくい可能性があるが、これまでの地縁、血縁、社縁のしがらみを超えた絆の可能性を模索できるかもしれない。ソシアビリテという概念は、第一に、多様な主体が緩やかにつながること、第二に、多様な種類のつながりの混合、第三に、一重ではなく重層的に張り巡らす仕組み、この三つを結晶させたものとなりうるのではないかと考えている。多様な主体が緩やかにつながるとは、「弱いつながりの強さ」という言葉で表現できる。弱いつながりは、つながっていない者同士をつなぐ「橋渡し」機能こそがその本質である。また、多様な種類のつながり、上野が言うように、非選択縁の閉塞感と選択縁の脆弱性を補うための多様な種類のつながりが混合することが望まれる。さらに、重層的に張り巡らす仕組みは、一つのつながりだけに過度に依存するのではなく、複数の依存先を重層的に張り巡らし、依存することによって、つながりを強固にする。熊谷晋一郎が言うように、自立とは依存先を増やすことである。薄く広く依存することで、つながりのすそ野を広げる。

コロナ禍で子ども食堂は大きな転機を迎えている。つながりをリノベーションする時代、これまでの居場所での子ども食堂に加えて、フードパントリーや弁当の配布活動も併用し、共食の場をどうデザインするか。災い転じて福となす。コロナ禍でこうした食卓をめぐるソシアビリテを構築するきっかけになればと願っている。

---

[1] 本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（挑戦的研究（開拓））「子ども食堂が切り開く新たなソシアビリテの可能性」（研究課題番号：19H05488）による

研究成果の一部である。本稿に関連する研究は名古屋都市圏研究会（https://nagoya-city-research.jimdofree.com/）の HP から無料でダウンロードできる。

[2] 株式会社インテージリサーチが 2019 年 3 月実施した「子ども食堂・フードバンク・フードドライブの認知度等に関する調査」は全国の 16 ～ 79 歳の男女 1 万 803 人を対象にしたインターネット調査で、子ども食堂などに対する認知度、運営への関心などを尋ねている（https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000464.000001551.html）。

[3] 『こども食堂の現状＆困りごとアンケート調査結果』（https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2020/04/musubie_Q_sheet_0423.pdf）、共同通信 2020 年 5 月 5 日「子ども食堂 9 割休止、NPO 調査　半数は食料配布に移行」参照。

[4] 東京新聞 2017 年 9 月 3 日朝刊 1 面「子ども食堂「だんだん」5 年で延べ 3000 人」

[5] 朝日新聞 2016 年 7 月 2 日朝刊 1 面「子ども食堂、300 ヶ所超す 貧困・孤食、広がる地域の支援」

[6] NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえと各地域ネットワーク団体等による共同調査 2019 年 6 月『全国箇所数調査 2019 年版』（https://musubie.org/news/993/ ）

[7] 沢田（1997：80 頁）

[8] 「子ども食堂」、「こども食堂」、「子供食堂」で検索（重複は 1 カウント）。2020 年 9 月末時点で、地方版を含む記事件数は朝日新聞が 1241 件、読売新聞が 1004 件である。

[9] 農林水産省、2018 年 3 月『子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～』（https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyoji/180412.html）

[10] Andreoni（1990:464）

[11] 『婦人公論』2018 年 9 月 25 日号「特集 これからは、ちょっと誰かの役に立つ」

[12] Tessa Morris-Suzuki（2020）は、草の根の自発的な活動、日本版 DIY のについて、歴史を遡って豊富な事例を紹介している。

[13] 子ども食堂の活動形態は大きく 4 つある。一番多いのが、ボランティアなど任意

団体（個人）型、その次に多いのが施設や事業所型、三番目に多いのが自治会などの地域団体型、最後にカフェなどの店舗型である。全国的に人口が多い都市部ほど子ども食堂が多く、人口が少ない町村部ほど少ない。ただ、任意団体で始めるも途中からNPO法人や社団法人に移行するところも、数は少ないが存在する。

[14] 大原悦子 ,2016『フードバンクという挑戦――貧困と飽食のあいだで』岩波書店、44頁

[15] 米山けい子 ,2018,『からっぽの冷蔵庫――見えない日本の子どもの貧困』東京図書出版、2-3頁

[16] 二宮宏之 ,2011『二宮宏之著作集 第三巻 ソシアビリテと権力の社会史』岩波書店、38頁。

[17] アソシエーション（結社）は、ボランティアや市民団体など共通の目的を達成するために意図的に組織された自主的な団体である。自治会など地域や地縁によって自然発生的に形成される団体であるコミュニティと対概念として用いられる。

[18] 前掲、沢田（1997）、82頁

[19] 上野千鶴子 1987「選べる縁・選べない縁」、栗田靖之編 1987年『本人の人間関係』

［文献］

Andreoni, James,1990, Impure Altruism and Donations to Public Goods: A Theory of Warm-Glow Giving, *The Economic Journal*. 100（401）: 464–477.

夏目漱石 ,「私の個人主義」、三好行雄編 ,1986,『漱石文明論集』岩波書店

Alexis de Tocqueville, 松本礼二訳 2005-2008年『アメリカのデモクラシー』岩波書店

阿部彩・村山伸子・可知悠子・鳫咲子 ,2018,『子どもの貧困と食格差――お腹いっぱい食べさせたい』大月書店

熊谷晋一郎 ,2020,『当事者研究――等身大の＜わたし＞の発見と回復』岩波書店

パオロ・ジョルダーノ著、飯田亮介訳 ,2020,『コロナの時代の僕ら』早川書房

Philippe Ariès,1960=1980 : 杉山光信・杉山恵美子（訳）『＜子ども＞の誕生――アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房

Lichterman, Paul and Eliasoph, Nina, 2014, Civic Action, *American Journal of Sociology*, Vol.120, No.3:798-863.

Mark Irving Lichbach, 1995, The Rebel’s Dilemma, The University of Michigan Press.

『婦人公論』2018 年 9 月 25 日号

Tessa Morris-Suzuki, 2020, *Japan's Living Politics: Grassroots Action and the Crises of Democracy*, Cambridge University Press

Ray Oldenburg（著）,1989=2013 : 忠平美幸（訳）『サードプレイス――コミュニティの核になる「とびきり心地よい場所」』みすず書房

Ruth Lister（著）,2011: 松本伊智朗（監訳）, 立木勝（訳）『貧困とはなにか――概念・言説・ポリティクス』明石書店

Robert Putnam（著）,2015=2017: 柴内康文（訳）『われらの子ども――米国における機会格差の拡大』創元社

沢田善太郎 ,1997,『組織の社会学：官僚制・アソシエーション・合議制』ミネルヴァ書房

上野千鶴子 , 2020,『近代家族の成立と終焉』岩波書店 .

宇野重規 , 2019,『トクヴィル : 平等と不平等の理論家』講談社 .

大村敦志 , 2002,『フランスの社交と法』有斐閣 .

――――, 2005,『生活のための制度を創る : シビル・ロー・エンジニアリングにむけて』有斐閣 .

喜安朗 , 2009,『パリ : 都市統治の近代』岩波書店

高澤紀恵 , 2008,『近世パリに生きる : ソシアビリテと秩序』岩波書店 .

平井一臣 , 2020,『べ平連とその時代 : 身ぶりとしての政治』有志舎 .

Robert Neelly Bellah（著）, 1991, 島薗進・中村圭志（訳）,『心の習慣 : アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房 .

グレン・H/ エルダー著『新版 大恐慌の子どもたち：社会変動と人間発達』